

土地改良部関係

農道整備に補助金を

農業の近代化を進めるためには、交換分合による農地集団化が前提となる。そこで、そのために必要な農道整備の補助金を、本年から新たに出すことにした。また、用水路やかんがい排水の公共事業費九億三千六百万円、さく井、溜池、畑地かんがいを実施する単県恒久事業費を増額し、農業生産の基礎を整備充実する。

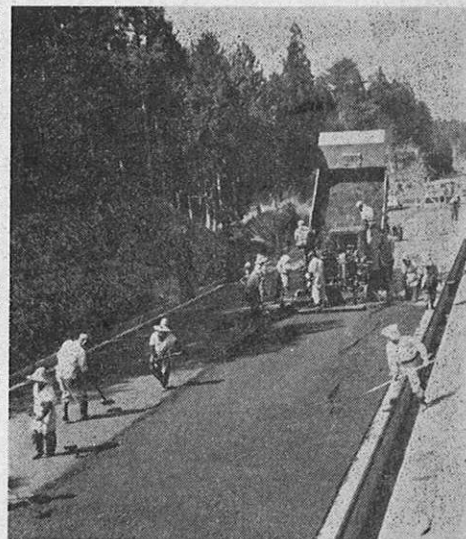
ブラジルに連絡事務所を

ブラジルは、本県と海外移民の関係で最も密接な国であるが、在伯県人会では同地に連絡事務所を設置する計画があるので、これを助成することにし、また日本とブラジル両国の理解を深めるために熊本県出身移住者の子弟を二名本県に留学させ、逆に本県から、海外実習生二名をブラジルに送り、日伯文化交流と移民の促進をはかることにした。

土木部関係

道路予算は大幅に増加

産業振興の基本となる道路の整備については、特に重点的に実施することとし、総額二十一億九千三百五十二万五千円を計上した。これは前年度にくらべて約一億八千万円増加したわけである。幹線道路であり観光道路としても重要な島原宇土線、熊本大分線、別府一の宮



線の各線とも、今年度もひきつづいて鋭意工事を進め、三十八年中には改良工事を完了し、三十九年中には全線舗装を完了する予定である。

また、国が直轄で実施中の国道三号線は、県負担金も前年より大幅に増加し、三十九年までには改良を済ませ、四十年中には全線舗装を目標に実施している。県単独事業では、道路の防塵工を大幅に採用し、特に家屋が集つていてほりのひどい処を工事することにし、その経費として約五千六百万円計上した。これは前年度の六百万円にくらべて飛躍的な増加である。

また、トラックやアスファルト撒布機などの機械力を増強して、道路整備をスピード化するため、約三千六百万円を計上している。木橋で危険な橋は計画的に永久橋に架け替えることにし、本年は五十三橋分の改築をすることにした。

港湾整備も進める

今年中に八代港の外港に五千トン級の船が着けるよう国の直轄事業と県工事を併行させて、物揚場造成や、しゅんせつをすすめることにした。長洲港も前年より引続き産業関連事業として泊地のしゅんせつを実施することにしている。これらに要する経費として合計一億三千九百六十九万円を計上した。

県営宅地分譲なども

住宅は県内で相当数不足しているが、本年は建売住宅五十戸、公営住宅百二十二戸の建設をするほか、前年に引き続き五千坪の宅地を造成して分譲することにしている。

産業開発青年隊を新設

土木建設事業の技術者不足と、農業用大型機械の実習訓練を考えに入れて、四十名定員の産業開発青年隊を新設することにした。

教育庁関係

高校生急増対策

水俣工業高等学校を新設し、本年は県立第二高等学校の新設と既設校に十二学級を増やし、高校入学の競争率を緩和する

特殊学級も増やす

精神薄弱児童を特に特殊学級編成として教育するため、本年も小学校、中学校併せて八学級増加することにしたため、小、中学校併せて、特殊学級は六十九学級となり、九州では最も多くなる。

スシつめ教室を解消

小中学校のスシつめ教室を解消するために、小学校では一学級児童五十六人を五十四人に、中学校では一学級生徒五十四人を五十二人に緩和し、教育内容の充実をはかることにした。

校舎の新築や改築も

高校の教職員百七十五名を増員するほか、継続工事中の熊本商業高校の改築、水俣工業高校の普通教室と実習室の新築、八代高校の移転新築、阿蘇高校、芦北農林高校、松橋高校の体育館新築

(十五頁へつづく)

二つのものさし

丸山 学

■昔のものさしと

昔のものさしで今の若いものを計つたら、ちぐはぐなのがましい。逆に今のものさしで昔のものを計つても、結果は同じである。

それで今の大人は若いものに失望し、若いものは大人を見限ることになる。多くの悲劇がここからおこっている。

どちらか一方が悪いのではなく、ものさしが変わったことが悪いのである。しかし世の中のものさしが変わることを悪いことだと云えるだろうか。変らないことがよいことだろうか。

■二つのものさし

固定したものさし

問題は、現代の日本の場合、戦前と戦後のものさしの変わり方がよい変り方であるか、悪い変り方であるか、と云う点にある。この答は簡単には出ない。ある部分ではよい変り方だと思われ、他のある部分では、たしかに悪い変り方をしていく。つまりこのものさしは竹やテープで作つたような、単純なものではない、ということである。

たしかなことは、世の中のものさしが変わらないで、一つのものに固定したらいけない、ということである。若しそうなら

■進歩がとまってしまう

若いものが、つぎつぎに老人と同じようになっていくだけの社会が、広い世間にはないことはなかつた。たとえば原始未開人のくらしがそのようなものであつた。そこでは歳をとつたものが、若いものを自分と同じようにすることを目標として生きていく。家長が家の教育者であり、酋長が部落の教育の支配者である。

このような社会は、酋長や家長にとつては、たしかに住みよい社会である。

ところが、そのような泰平の天下は、正しく進歩した社会と力くらべをすると、たちまちに崩れ去ってしまう。

■としよりのものさし

大平洋戦争で崩れ去つた日本が、実はその一例であつた。戦時中のことを思い出せば、すぐわかる。あの時代には、日本中の若者が権力者に対して絶対服従を強いられ、権力者は自分たちに最も好ましい形に若い者をつつけていった。みんな全力をつくしたのだが、戦争には完敗した。

年寄りのものさしだけがたよりであつたからである。負けてよかつた、と云う理窟がこで成立する。日本人が、あらためて世界を見渡してみると、日本を打ちまかした国々

は、日本とちがつて、老人も若いものも力を伸ばすような組織であつて、それぞれ進歩を続け

ており、日本はその反対に「封建的」と呼ばれる甚だちおくれた性格のものであつたことを、われわれはあらためて思い知らされたのであつた。

■新しく変りすぎるものさし

この逆の場合も考えてみる必要がある。つまり世の中がつぎつぎと新しく出現するちがつたものさしで動かされることがあると、それはもう「ものさしのない世の中」と云うことになる。

ものさしと云うのは、ある程度固定していて、それでいろいろのものをはからねばならぬ

そんなものさしがないければ世の中はまづくらで、何がよいものか、何が悪いものか、どんなことをしたらよいか、まつたく解らなくなり、混乱するばかりである。敗戦直後の日本人が一時このような状態に置かれた。

■新旧二つを使いわけ

今はもうそんな状態ではない。古いものさしのよさを、新しい人々が段々とととり、新しいものさしに、なかなかよいところがあることを、古い人々の方でも認めてきた。

この二つのものさしがお互いの存在をみとめたところに安定がある。

新しいものさしと古いものさしとが並存して、適当に使分けられる世の中が一ばんよい、と云わなければならぬ。そして、今日新しいものさしと呼ばれているものも、また時がくれば、より新しいものがあらわれて、こんどは古い方に廻るだろう。

その移行が適当な間隔をおいて、順調に行なわれることが好ましい。

■お互い理解しあつて

一方が他方を急がしめてはならぬ。お互いが相手を認め、理解し合ひながら、全体として眺めると、いつの間にか入れ替るようになりたい。

これを日常生活の観点から見れば、老人が若いものを理解し、若いものが老人を理解し、お互いに軽視したり、毛嫌いしたりしないで、緊密な話し合いの上で、日常の共同生活のときに発生する問題を解決して、すぐしていくことだと思ふ。

この手続を、みんなが面倒くさがらずに実行することが、何よりも大事なことはあるまいか。

▲まるやま・まなが 熊本商大附属高等学校長